

# 強者の戦略

こんにちは。日本史の岡上です。一週間ほど時間がありました。みなさんうまく解答できましたか？

今年度の東大日本史の第1問は「遣隋使・遣唐使の役割と意義」を考えさせる問題でした。今回のような古代における国際関係を考えさせる問題は、過去にも何度か出題されています（下記参照）。

2003年 [1] 律令国家の国家意識と外交姿勢  
1994年 [1] 倭の五王と推古朝の外交姿勢  
1992年 [1] 律令国家形成期の国際環境

そこで、まずは問題の解答解説に入る前に、東大日本史を考える上で必要な「古代における東アジア諸国の国際関係」についてまとめていきましょう。

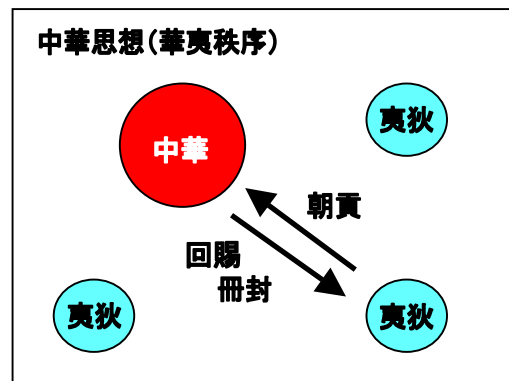
東大日本史が受験生に求めているのは、単純な通交関係の理解（例えば「聖徳太子が遣隋使を派遣した…」とか「第一回遣唐使では犬上御田鍬が派遣された…」とか）ではありません。中国の王朝の変遷とそれに伴う朝鮮半島情勢の動向、そしてその間でその時々に対応を変化させる日本（倭国）の動きが問題のテーマになってくるのです。それは過去の問題にも今年度の問題にも（そしてこれから出題される問題にも！？）一貫したテーマといえます。だからこそ、そのテーマとその「みかた」を理解してしまえば、東大日本史恐れるに足らず！というわけで、少し長くなりますが、まずは以下のテーマと「みかた」をじっくり理解してもらいたいと思います。

## <古代における東アジア諸国の国際関係>

### 1. 朝貢・冊封とは何か？

古代中国の皇帝が周辺地域を統御するにあたって、前提となった思想に「中華思想」があります。簡単に言えば「世界の中心は中華（中国の自称）である」という思想です。

この前提に立ちますと、中華という「中心」に対して「周辺」が設定されますし、中華を「文化」の発信地と考えたとき、その周辺は「野蛮」と設定されます。つまり、世界を「中華」と周辺の「夷狄<sup>いてき</sup>」（中国周辺の異民族の総称）に区分してとらえるもので、**華夷秩序**とも呼ばれます。



その思想のもとで中国は領土拡張を行うわけですが、それも世界の中心の優れた文化が未開の地に広がる行為（これを「徳化」と称します）であると正当化されるわけです。しかし、その行為には多かれ少なかれ侵略行為が含まれるので、周辺地域にとっては由々しき事態！そこで、中国との良好な関係を作るために「<sup>ちようこう</sup>朝貢」・「<sup>さくほう</sup>冊封」が行われました。

まず「朝貢」ですが、読んで字の如く中国皇帝に貢物を持って挨拶に行くことをいいます。『後漢書』東夷伝にみられる

安帝の永初元年（=107年）、倭の国王帥升等、生口（=奴隷）百六十人を献じ請見を願う。

（『後漢書』東夷伝、原漢文）

# 強者の戦略

などは朝貢の例ですね。ちなみに「朝貢」には往々にして中国皇帝から「回賜<sup>かいし</sup>」（物品を賜る）が行われます。卑弥呼が朝貢を行った際に、魏の皇帝より金印や銅鏡 100 枚を賜ったことは有名ですね（『魏志』倭人伝）。

一方、「冊封」ですが、これは中国皇帝から周辺地域の支配者に対して、その支配を認め称号を与える行為を言います。冊封を受けた場合、周辺地域は中国に対し服属する形式をとります。

ここで誤解してはいけないのは**必ずしも「朝貢」と「冊封」はセットで行われるのではない**ということです。圧倒的な軍事力・経済力をもつ中国に対して周辺地域は自国の力量をはかりながら、時に朝貢を行い、時に冊封を受けるなどして存続を図っていました。そして、この「朝貢」と「冊封」がどのような場面で行われたのか（もしくは行われなかったのか）が、東大日本史でもよく問われるポイントとなっています。

ですので、そのポイントに注目しつつ、次に時代を区分しながら日本（倭国）と中国、そして朝鮮諸国との関係をみていくことにしましょう。

## 2. 東アジア諸地域の国家形成

中国大陸では、魏・呉・蜀に王朝が分裂した三国時代の後、魏王朝を受け継いだ晋が 280 年に中国統一を果たしましたが、4 世紀初め頃には匈奴<sup>きょうど</sup>をはじめとする北方の異民族の侵入を受けて、中国北部は五胡十六国と呼ばれる混乱状態に陥りました（北朝）。一方、漢民族を中心とする人々は、江南地域を中心に国家を形成していきます（南朝）。これが後漢滅亡（220 年）以降、中国が分裂抗争を繰り返す魏晋南北朝時代のはじまりとなります。



このように中国が分裂の時代を迎え、周辺諸民族に対する支配力が弱まる中、東アジア諸地域では国家形成が進みました。

日本（倭国）においては大和政権が誕生し、朝鮮半島においては**高句麗・新羅・百濟**の三国、さらに鉄資源の確保のため大和政権が密接な関係をもった**伽耶 (任那)**と呼ばれる小国連合が形成されました。



しかし、こうして形成された国家領域が安定することはありませんでした。4 世紀後半になると、高句麗は南進策を進め新羅・百濟、さらには伽耶（任那）を圧迫する状況も起こりました。

このような状況下で**日本（倭国）は朝鮮半島南部の利権を確保する必要性に迫られます**。その方策として大和政権が行ったのが**中国への朝貢と冊封**でした。**倭の五王（讚・珍・濟・興・武）**が相次いで中国の南朝・宋に遣使したことが『宋書』倭国伝には記されています。ちなみに距離的な観点から、南朝に遣使することがどれだけ朝鮮半島に軍事的・外交的な拘束力を持つのかは疑問ですが、北朝は異民

# 強者の戦略

族（中華思想から考えれば夷狄）が中心となって国家を形成していたので、朝貢を行う相手としては適当ではなかった事情があると考えられます。

### 3. 魏晋南北朝時代（439～589年）の国際関係

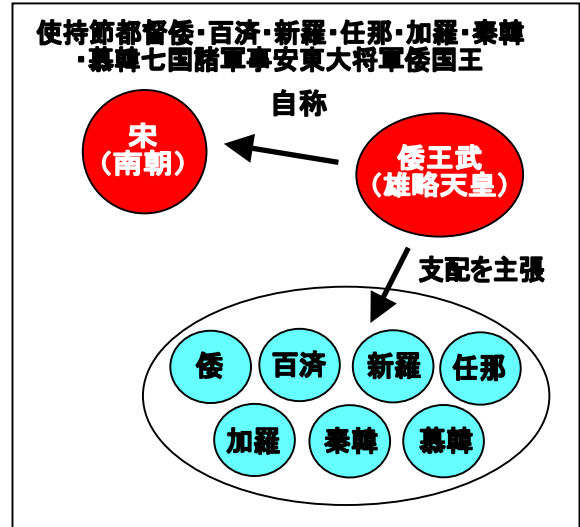
**倭王武（＝雄略天皇）**は478年に南朝の宋の順帝に対し上表文を送りました。その史料から当時の国際関係を考えていきましょう。

倭王武の上表文（478年）

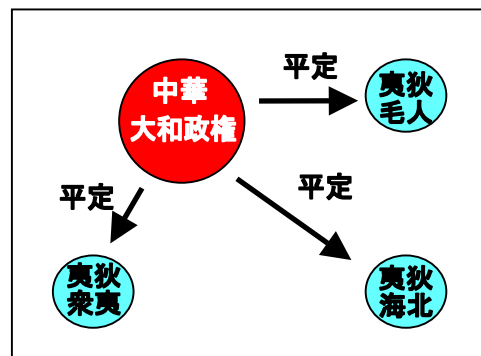
- ① 興死して弟武立つ。自ら使持節都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事安東大將軍倭国王と称す。
- ② 順帝の昇明二年、使を遣して上表して曰く、封国は偏遠にして藩を外に作す。昔より祖禰躬ら甲冑を擐き、山川を跋涉して寧処に違あらず。東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平ぐること九十五国。（略）
- ③ 臣（武）、下愚なりといへども、忝なくも先緒を胤ぎ、統ぶる所を驅率して、天極に帰崇し、道百済を遥て船舫を装治す。（略）
- ④ 詔して武を使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大將軍倭王に除す。  
（『宋書』倭国伝、原漢文）

まず、①の部分では興（＝安康天皇）が死んだ後、武（＝雄略天皇）が即位し、「使持節都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事安東大將軍倭国王」と自称したことが述べられています。

「使持節都督」や「安東大將軍」は軍事的な指揮権を意味する称号ですので、自称ながら**百済や新羅**といった朝鮮諸国に対する優位な立場を主張していることがわかりますね。

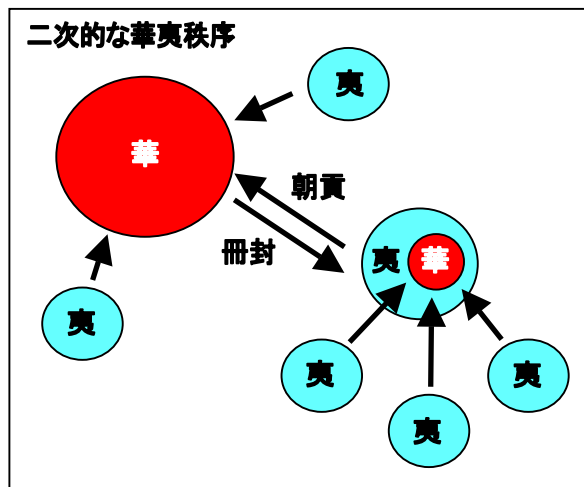


次に②の部分では武の祖先が国家統一のために列島内の「毛人」や「衆夷」、さらには「海北」（＝朝鮮半島南部）を制圧したことが書かれています。ここで注目しなければならないのは、武が中国から離れた土地にあって「毛人」や「衆夷」といった夷狄を平定し支配下に治めたとしている部分です。つまり、ここには「大和政権＝中華」・「毛人・衆夷・海北＝夷狄」とする華夷秩序が成立しているわけです。



その上で③にあるように武は自らを「臣」とし中国皇帝を「天極」と表現して、自らの行為を「帰崇」としているわけです。これは中国皇帝に対し臣従する姿勢を明確にした上で、**中国皇帝に朝貢し、冊封を求めている**のです。つまり、ここでは二次的な華夷秩序が形成されようとしています。

# 強者の戦略



もっとも④の部分では、倭王武（=雄略天皇）が自称した称号のすべてが認められたわけではなく、百済を除いた形で冊封が行われました。百済はこの時点で既に宋に朝貢を行っていたので、倭王武（=雄略天皇）の支配下に連ねることは問題があったようです。

それでは、なぜ倭王武（=雄略天皇）はこのような対外政策をとったのでしょうか。

国際的事情からみると、朝鮮半島における優位性、特に冊封によって朝鮮半島南部の軍事的指揮権を得ようとしているところから、当時、**南進策をとっていた高句麗への対抗を図ろうとしている**と考えられます。

一方、国内的事情をみると、倭王武（=雄略天皇）治世中の5世紀は、未だ大和政権の政治権力が突出してはおらず、国内の諸豪族がそれぞれの地域で一定の力を有していました。例えば、この時期の巨大な前方後円墳が大和を中心とする近畿だけでなく、中国地方などにも分布していることからその状況がうかがえます。



その中で、**大和朝廷が中国皇帝から冊封を受けることで政権の地位を安定させようとした**と考えられます。

## 倭国と宋の関係

朝貢 ○ 冊封 ○

国際的理由→**高句麗への対抗のため**

国内的理由→**政権の安定を図るため**

## 4. 隋時代（589～618）の国際関係

6世紀に入ると高句麗の南進により、南下せざるをえなくなった百済は伽耶諸国へと勢力を拡大していきました。大和政権の伽耶諸国における勢力は減退していき、512年には伽耶西部の4県を百済に割譲するなどしていきます。また新羅も562年に伽耶東部を併合し、ここに大和政権が有していた半島南部の勢力は完全に失われていきました。



しかし、朝鮮半島南部の利権をあくまで主張する倭国は、以後、伽耶を支配下に治めた**新羅に対して「任那の調」を要求**することになります（「任那の調」とは服属の意味を含んだ貢納物のことをいいます）。あくまで**新羅を夷狄として扱い、倭国への従属的な態度を迫るその姿勢には、先ほど触れた二次的な華夷秩序が投影されています**ね。新羅としても国境を接し、いよいよ直接対決することになった百済と倭国が軍事的に結びつくことを恐れてか「任那

# 強者の戦略

の調」を拒絶するには至りませんでした。

このように朝鮮半島情勢が緊迫する中、581年に隋が建国され、589年には南北に分裂していた中国が統一されることになりました。特に隋が高句麗遠征を画策する国際情勢をみて、倭国は朝鮮半島に対する優位性を保つために、倭の五王の遣使以来途絶えていた中国との交渉の再開を図っていきました。

**第1回遣隋使**は推古天皇治世中の600年に行われますが、『隋書』倭国伝にのみ記載されています。

開皇二十(600)年、倭王姓阿每、字多利思比孤、号阿鞬鷄弥、使を遣はして闕に詣る。上(=文帝)、所司をして其の風俗を訪わしむ。使者言う、「倭王は天を以て兄と為し、日を以て弟と為す。」

(『隋書』倭国伝、原漢文)

この時は倭国の後進性を隋の文帝に指摘され、ほとんど外交的な成果を得られなかったようです。ですから、**隋と速やかに外交関係を構築していくためにも国内の改革が急がれることになったと考えられます**。推古朝の摂政聖徳太子が中国の制度を取り入れる形で603年に冠位十二階、604年に憲法十七条を制定し、氏姓制度を基本とする体制を官僚制に転換しようとした背景には、このような国際関係があったと考えられます。

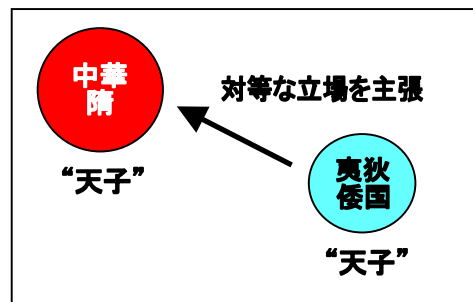


その後、国内改革がある程度の進んだ607年に**第2回遣隋使**として小野妹子が派遣されます。

大業三年(607年)、其王多利思比孤、使を遣はして朝貢す。使者曰く、聞く、海西の菩薩天子、重ねて仏法を興すと。故に遣して朝拜せしめ、兼ねて沙門(僧侶)数十人をして、来って仏法を学ばしむと。其の国書に曰く、「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙無きや、云云」と。帝(煬帝)之を覽て悦ばず。鴻臚卿(外交を司る官)に謂ひて曰く、「蛮夷の書、無礼なる有らば、復た以て聞する勿れ」と。

(『隋書』倭国伝、原漢文)

この史料は有名ですね。ここに紹介されている日本の国書では倭国王も中国皇帝も同様に「天子」と表現されています。**中国皇帝に対し対等な立場を主張**しようとしているわけですね。



もちろん隋の煬帝は「蛮夷の書、無礼なる有らば、復た以て聞する勿れ」とあるように不快感を示し、対等外交を認めたわけではありません。さらに、史料冒頭には倭国が「使を遣はして朝貢す」と表現されているように、中国皇帝は倭国をあくまで朝貢国として位置付けています。しかし、ここでは**「冊封」が行われることはありませんでした**。

ではなぜ、「冊封」なき「朝貢」が行われたのでしょうか？

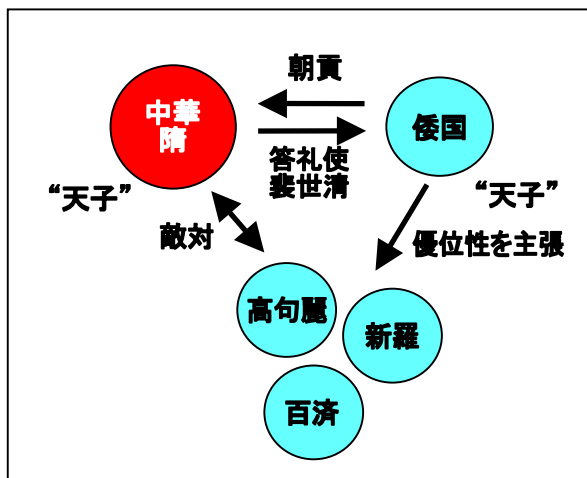
国内的事情からみれば、推古朝の頃には中央の有力豪族が大臣・大夫として合議を行い、国造が地方

# 強者の戦略

支配を行うといった政治体制が整っていたので、**国内統治のために従来のような中国皇帝の権威を必要としなかったこと**が挙げられるでしょう。

一方、国際的事情を考えれば、当時、高句麗・新羅・百済の朝鮮三国が相次いで隋に朝貢し冊封を受けていた事情がありましたので、この情勢下で倭国のみが冊封を受けなければ、**朝鮮三国よりも国際的に優位な立場を主張**することができます。ですから、607年の国書で倭国が「天子」と名乗った一件についても、隋が高句麗と敵対関係にあり倭国と敵対することを望まない状況下で隋との対等な立場を確保し、それを基に**朝鮮半島南部、特にこの段階で「任那の調」を要求している新羅に対して優位性を確立しようとしたのだ**と考えられます。

実際、煬帝は国書に激怒しながらも高句麗遠征を見越して、倭国に答礼使として裴世清を派遣することになりました。



その後、答礼使裴世清の帰国を目的とした608年の遣隋使には、高向玄理・僧旻・南淵請安が随行するとともに、国書には前年の煬帝の不興を意識してか「東の天皇、敬みて西の皇帝に白す」と表現が改められることになりました。ここに**倭国は中国の「皇帝」に対し「天皇」という独自の立場を主張していくこと**になりました。

## 倭国と隋の関係

朝貢 ○ 冊封 ×

国際的理由

→ **朝鮮半島南部、特に「任那の調」を要求している新羅に対して優位性を確立しようとしたため**

国内的理由

→ **国内統治に中国皇帝の権威が必要でなかったため**

## 5. 唐時代 (618~907) の国際関係

隋は大運河の建設といった国内事業や、高句麗遠征による負担が過重なものとなって、ついに618年に滅亡し、変わって**唐**が成立しました。

唐は均田制と租庸調制を核とした律令に基づく中央集権的な国家体制を強化し、周辺諸国を圧迫していきました。それに伴って、東アジア諸国の動きも活発になりました。



まず倭国は630年に遣隋使の経験をもつ犬上御田鍬を**第一回遣唐使**として派遣し、隋の滅亡と新たな唐の成立に対応していきます。

また、朝鮮三国も唐が成立すると早々に唐に朝貢を行い、唐はそれに応えて、624年、高句麗王に上柱国・遼東郡王を、百済王に帶方郡王を、新羅国に柱国・樂浪郡王の称号を与えました。このように**朝鮮三国は隋に引き続き唐からも冊封をうけること**になりました。

# 強者の戦略

しかし、強大な力を有する唐の成立は東アジアの情勢を安定させることはありませんでした。

百済では641年に義慈王がクーデタによって権力を掌握し、新羅領（伽耶地域）に侵攻します。ちなみにこの動きに対し倭国は従来新羅に求めていた「任那の調」を今度は百済に対して要求しました。あくまで朝鮮半島南部の利権を主張するのが倭国の一貫した外交方針です。

高句麗においても642年に宰相の泉蓋蘇文<sup>せんがいそぶん</sup>が権力を奪取し、百済と結んで新羅領をうかがう動きを見せます。このように新羅は百済・高句麗の双方から攻められ、また倭国も「任那の調」確保のため百済を支援したため、新羅は必然的に唐を頼るしかありませんでした。こうして、唐は新羅の要請にも応える形で645年、高句麗への出兵に踏み切りました。

そして、唐の高句麗遠征が行われた645年の6月、中大兄皇子・中臣鎌足らは、唐からの帰朝者（高向玄理・僧旻・南淵請安ら）と結んで、蘇我本宗家を倒すクーデタ（乙巳の変）とそれに続く政治改革（大化の改新）を断行します。大陸の緊張が遣使と留学生によってもたらされ、大化の改新の原動力となったと考えられます。

ただし、この時期においても倭国は遣唐使を派遣しながらも他の朝鮮三国のように唐から冊封を受けられることなく、みずから改新政治を行った事実には注目すべきでしょう。もちろん、朝鮮三国と日本では中国からの遠近の差があることは考えなければなりませんが、ここにも倭国を中心とした二次的な華夷秩序の投影をみることができます。ちなみに改新政治で採用された年号の「大化」には「天子の徳を人民に及ぼす」の意があり、意図的に「天皇」を中心とした国家体制と国際秩序が作り出されようとしていることがここからも分かりますね。

さて、その後の朝鮮半島ですが、唐と同盟を結んだ新羅が660年に百済（663年に倭国は百済救援のため白村江に出兵するも惨敗）を、668年に高句麗を滅亡させ、さらに直接境界を接することで対立し

た唐を新羅が追い出し676年に半島を統一します。その新羅の唐や倭国に対する態度は、その時々々の情勢を反映して変化していきました。

新羅が半島を統一してしばらくは唐・新羅の緊張関係が続いたため、新羅は日本に貢調使を送り、臣従する態度をとりました。しかし、733年に新羅と唐の国境が新羅の要求通り唐に認められ、唐を中心とする国際秩序が安定してくると、新羅は倭国に対し対等の国交を要求したので、両国の関係は悪化しました。例えば753年に、唐の朝賀の場で藤原清河が新羅の使者と席次争いをしたエピソードなどはこの状況下で生まれました。

## <問題の解答解説>

かなり紙面を費やしてしまいましたが、しっかり理解できましたか？

さて、以上の事項を踏まえて、問題の解答解説に入りたいと思います。東大日本史の基本は、設問・資料文から情報を正確に導き出すことです。まずは、設問部分の確認から始めましょう。

### 設問より

テーマ：7・8世紀の遣隋使・遣唐使の役割と意義  
条件：東アジア情勢の変化に対応した時期区分を行うこと

次に資料文から必要な情報を読み取っていきます。

### (1) より

時代：7世紀初頭

- 607年遣隋使：国書にある「天子」に対し煬帝が不興を示した。
- 608年遣隋使：国書の表現が「東の天皇」に改められた。
- 推古朝に天皇号が成立した説もある。

# 強者の戦略

a. からは倭国が隋に対して対等な立場を主張することで朝鮮諸国への優位な立場を築こうとしていること、一方、b. からはあくまで隋との関係調整を図ろうとしていることが読み取れますね。

つまり「**倭国が独自の立場を隋に主張することで朝鮮諸国への優位性を保とうとした**」とまとめることができます。一般に天武朝に成立したと考えられている天皇号について、推古朝説が強調されていることも、倭国の立場の独自性を導くためと考えます。ちなみに教科書に記載されている一般的な学説とは違った学説をあえて記載するあたりは、受験生に知識だけでなく考える姿勢を身に付けてほしいという、東大日本史のメッセージとも受け取れますね。

## (2) より

時代：7世紀半ば

d. 659年遣唐使：翌年(660年)の軍事行動(=百済侵攻)のため帰国がかなわなかった。

e. 669年遣唐使：唐の高句麗平定の祝賀が目的であった。

この部分からは**遣唐使が唐の朝鮮侵攻と関係している**ことがわかります。d. のような事態を招いた背景には**倭国が百済支援を行っていた**ことがあるでしょうし、またe. に関しては遣唐使があくまで唐に対する日本の朝貢として行われ、**唐・朝鮮・倭国の国際関係の調整を企図していた**ことを示しています。

## (3) より

時代：8世紀初頭

f. 遣唐使が30年実施されなかった。

g. 702年遣唐使：新たな国号である「日本」を唐に承認してもらうことが使命であった。

h. 8世紀の遣唐使：20年に一度の朝貢が約束されている。

f. の空白の30年については、国内的・国際的両面から考えることができます。まず、国内的には672年の壬申の乱に伴う政局の混乱と、天皇を中心とする律令国家の構築が行われた時期であり、遣唐使の派遣のタイミングを逸していたと考えられます。一方、国際的には新羅が半島を統一し唐と対立する中で、新羅が唐を牽制する目的で倭国に頻りに貢調使を送り臣従する態度を取っていたことから、唐に対する外交的態度が難しくなっていたためと考えられます。

しかし、g. h. にあるように8世紀になると新羅と唐の対立もある程度解消され、唐を中心とする国際秩序が安定してくるなかで、「**朝貢**」によって**唐と良好な関係を築き、「日本」の国号を承認してもらうことで国際的な立場を安定させていく**動きがみられます。702年が大宝律令制定の翌年であることから、律令国家の成立という事情がその背景にあることは言うまでもありません。

## (4) より

時代：8世紀前半

i. 717年遣唐使：吉備真備・玄昉が渡唐。

j. 733年遣唐使：儒教・音楽などの書籍、仏教経典などがもたらされる。

i. では吉備真備・玄昉の名前が挙がっていますが、両名とも後に橘諸兄政権で活躍する人物であることから、当時唐からの帰朝者が政権において重職を務めるなど、**国内政治に影響を与えた**ことが分かります。またj. からは**遣唐使によりさまざまな文化が伝えられた**ことが読み取れます。

以上、資料文の読み取りを行いました。設問には「7・8世紀の」とあるので、資料文にない8世紀後半にも言及しなければなりません。文字数の制限などもあり、どこまで触れられるかは難しいと



# 強者の戦略

ころです。

しかし、例えば藤原仲麻呂の時代に行われた官名の唐風化や、天平文化の隆盛などを想起すれば、8世紀をかけて唐より政治制度や文化が日本に流入した状況をつかめるのではないのでしょうか。

以上をまとめて、解答を作成すると次のようになります。

## 【解答例】

7世紀初頭の遣隋使は、倭国が独自の立場を隋に主張することで朝鮮諸国への優位性を保とうとした。7世紀半ばの遣唐使は、唐の対外政策による国際的緊張に左右されながらも、国際関係の調整を企図して行われた。8世紀の遣唐使は、唐を中心とする国際秩序の安定の中で、天皇を中心とする律令国家の成立を対外的に示す一方で、定期的な朝貢を通じて政治制度や文化の摂取が図られた。(177字)

さて、みなさんの解答はいかがだったでしょうか？

論述問題の解答はもちろん一つではありませんので、「これはどうだろうか？」と自分では判断つかないものは必ず、添削してもらうことをお勧めします。

**この『強者の戦略ホームページ』でもメールにて質問などを受け付けていますので、どしどし送ってきてくださいね。**

それから、今回は解説できませんでしたが、最初に挙げた東大の「2003年[1]律令国家の国家意識と外交姿勢」、「1994年[1]倭の五王と推古朝の外交姿勢」、「1992年[1]律令国家形成期の国際環境」も興味があれば挑戦してみてくださいね。今回の「みかた」がしっかりと身に付いていれば、どの問題も

しっかりと論点を押さえた解答が書けることと思います。

それでは、今回はこの辺にいたしましょう。次回「東大日本史のみかた」をお楽しみに！！